

娘からの贈り物

前・東芝病院産婦人科外来

熊澤 万里子

私の妊娠・出産体験

私は今年の夏、初めて出産を経験しました。助産婦として妊産婦さんたちに携わってきた私にとって、妊娠・出産はとても興味深い反面、はじめは不安でいっぱいでした。

妊娠前に私の思い描いていたマタニティーライフは、毎日が楽しく夢のような生活で、一種憧れの日々。しかし実際は、初期につわりで苦しみ、中・後期には頻尿や胎動で睡眠不足に悩み、時には初めて経験する内診の痛さを必死にこらえることもありました。

予定日が近づくにつれ、私の中で不安と同時に、「私は助産婦なのだからいい分娩をしなければならぬ！」という思いが生まれ、日をますごとにその思いに縛られ苦しくなっていました。今考えてみると、その思いは私にとってのいい出産ではなく、周囲にとって、つまり「周囲から立派だと思われる出産にしたい」という、自分の見栄に過ぎなかったのだと思います。

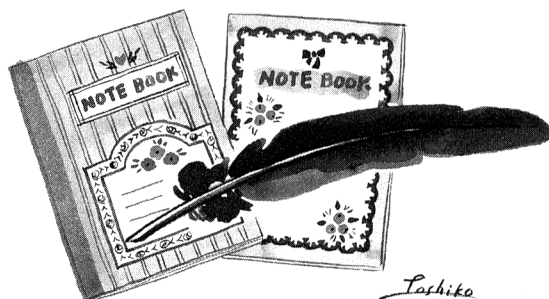
ちょうど予定日当日に、本格的な陣痛が始まり入院しました。だんだん陣痛が強くなるにつれ、「絶対に騒いではいけない」と自分で自分に言い聞かせ、ベッドの上で口をへ字に結んで転がり苦しんでいました。分娩台へ移動し、押し寄せてくるさらに激しい陣痛で仰臥位になれずに座ったままの私に、ついてくれた助産婦さんが「この状態が楽だったら、しばらくこのままでいましょう」と、両手を差しのべ支えてくれました。そして陣痛の痛さに自分を失いかけたとき、助産婦さんが

「痛いときは『痛い』って声を出したほうが楽になることもあるのよ」と。そこで私は初めて「痛い！」と声に出してみました。その瞬間、体から力が抜け、妊娠中からの「助産婦だから」という自分を縛りつけていた呪縛のようなものがスーッと解け、「一人の女性として出産しよう」と思い、気持ちが軽くなったのです。その後も絶え間なく押し寄せてくる陣痛で苦しむ私に、折にふれて助産婦さんがやさしい言葉をかけてくれます。「手の甲より手の平を握るほうがいいかな」と、私の手を自分の手の平に握り変えてくれました。そんな何気ない気配りが心の支えとなり、“出産に立ち向かう”という大きな力になりました。その後分娩は順調に経過し、ほどなく無事に女児を出産できました。

助産婦職のすばらしさを再確認

私は今、自分の出産にとっても満足しています。自分なりに、どうして「満足している」といえるのかと考えてみました。時々寝入りにつく前に、よく出産当日の場面がよみ返ってくるのですが、それは苦しみながらベッドの上を転がり回る私の姿ではなく、分娩台の上で励まされながら「出産」と正面から立ち向かう私の姿なのです。その時のことを思い出すと、とても安らかな気持ちになります。満足のいく出産ができたのも、私にやさしい言葉とケアで力を与えてくれた助産婦さんのおかげだと思います。

一つの生命が宿り、様々な苦しみや喜びを経て一人の人間が世の中へ誕生する……あたり前のよ



うに毎日色々な場所でくり返し起きている出来事なのですが、それはとても神秘的で、何よりも感動的なことだと思います。そんな「生命の誕生」というすばらしい場面にかかわり、その人に強い力と勇気を与えることのできる助産婦という職業は、無限の可能性のある実に魅力的な仕事だと、自分の出産をとおして初めて実感しました。

母親一年生としてのスタート

出産して3か月が経とうとしています。この間、私にとって戦争のような毎日でした。1日中泣きっぱなしの娘と一緒に泣いたこと、乳児湿疹が顔じゅうにできてアトピーではないかと悩んだこと、鼻がつまって苦しそうに息をする娘を見て窒息しないかと一晩中見ていたこと、部屋に蚊が入り、寝ずに蚊と戦ったことなど、数えきれない程色々ありました。今ふり返ってみると、人様に笑われてしまいそうなことばかりですけど、そのときは真剣に悩み苦しみました。そんなとき、同時期に出産した友人と話をすると、同じようなことで悩んだり苦しんだりしていました。そして「みんな同じなんだな」と、強く感じました。

私はやっと今、本当の意味で母親としてスタートできたような気がします。細かいことで苦しみ、悩み疲れて逃げ出したくなることもあります。が、娘の笑い顔を見ていると、そんな思いもどこかに飛んでいってしまいます。

今、最高の幸せを感じて……

以前、友人からこんな話を聞きました。「出産

直後、母親に電話をして『お母さん、私を子供の産める体に産み育ててくれてありがとう……』って泣きながら言ったんだ。そのときは、何も考えずにその話を聞いていましたが、今初めて彼女の気持ちが手に取るようになります。自分の子供が産め、この手で抱ける、最高の幸せを今、感じています。

子供は、私の想像以上の幸福と笑い声を周囲にもたらししてくれます。娘の笑った顔、泣いた顔、怒った顔、すべてが私のエネルギーの源です。

今回、このりれー随筆のお話をいただいたとき、「私になんかとても書けない」と随分考えましたが、娘を無事出産し母親になることができたことへの感謝と、それを助けてくださった方々、私を産み育ててくれた両親、いつも私のことを大きな愛情で支えてくれる夫、そして何よりもこの世に無事生まれ、私に幸福という大きな贈り物をくれた娘への感謝の気持ちを、何かの形で残しておきたいと思い引き受けました。

私もまたいつの日か、助産婦として働く日が来ると思います。「その時にはこんなこともしてあげたい、あんなことをしてもらったらうれしいだろう」と、今とても新鮮な気持ちで考えています。今までは助産婦としてだけのかかわりしかできませんでしたが、これからは一人の女性として、そして母親として、同じ目の高さで一緒に悩んだり喜んだりできる気がします。私が助産婦さんから力と勇気を与えていただいたように……。

次は、私の助産婦学校時代の友人、桑原紀子さんにバトンタッチします。